vol.37 戦乱の時代を生きた

額に刀傷のある男

■ 出土地：首里城右掖門付近

首里城右掖(うえきもん)門付近の発掘調査によって、城壁内郭内から額に傷のある人骨１体分が発見されました。人骨は岩陰に葬られており、解剖学的位置関係（ヒトの形）を保たないことから、遺体は風葬され、骨になった後に壁の奥に寄せられたと考えられます。首里城築城以前のグスク時代に生きた人のようです。

分析の結果、被葬者は成人男性で年齢は 35 ～ 45 歳、身長は 156 ～ 158cm と現代人と比べて全体的に小柄ですが、上肢が発達するがっしりした体格だったと推定されました。

注目されるのは、この男性頭骨の額の右側に約 4cm にわたって刀傷と考えられる深い外傷が認められたことです。傷は、あたかも正面から鋭い刃物で切り付けられたかのように、右側の額の生え際から眼窩(がんか)（目の上の骨）の内側縁に斜めに深く入り込んでいます。かろうじて脳に達するものではなかったものの、相当な出血を伴った事が想像されます。

さらに驚くべきことに、彼はこれが死因とはならず、受傷後も長く生きていた事も明らかでした。傷口に治癒した形跡が認められるからです。

生前、彼には何があって額に深い刀傷を負ったのでしょうか、想像が膨らみます。首里城築城以前、戦乱の時代と言われるグスク時代を象徴するような男性ではないでしょうか。〈片桐 千亜紀〉